

黒島傳治、壺井繁治、壺井栄の 未発表書簡の翻刻について

松本昭雄

さきに、平成十五年九月、本学附属図書館において松本文庫所蔵壺井栄自筆原稿五種を制作発表したところであるが、ひきつづいて同文庫蔵の黒島傳治二通、壺井繁治四通、壺井栄一通計五通の未発表書簡を翻刻するものである。

これまで、黒島傳治の書簡については、定本黒島傳治全集（平成十三年七月二十五日、勉誠出版刊全五巻、以下「定本全集」とよぶ）において、大正七年から昭和七年の書簡八十八通が収録されている。

定本全集第五巻解説・解題（佐藤和夫）冒頭に、「書簡はすべて原物に当たり八八通収録した。そのうち四通は未発表である。書簡の内容は、兄弟、家族への情愛がにじみ出ているものや、自分の体のこと、小豆島の風物、東京の友人や文学の動向などつぶさに書き記され、当時の心境と姿が再現されているがその背後に

は、戦争という二文字がいつも、黒島傳治の脳裏から離れることはなかったことがうかがえる。」と解説されている。

傳治が、病身で四十四歳四カ月（明治三十一年～昭和十八年）の短い生涯だったとはいえ、文学者としては、残された書簡はあまりにも少ない数といえる。また、市場流通のことも聞かない。本稿収録はわずか二通であるが、従って加える意義は大きいものがある。

さて、収録の二通は、ともに受信人が高須先生となっていて、高須芳次郎梅溪と推定される。

傳治と高須梅溪との関係は、傳治の文学形成や文壇への足がかり模索の時期において重要なものがあつたと考えられる。

まず、大正八年（一九一九）二十一歳の傳治は徴兵により軍隊に入り、看護兵となった。「軍隊日記」は、その軍隊での生活を書いているが、大正十年（一九二一）四月二十二日の日記の最後のくだりに、

「壺井兄に、

自分は、近いうちにシベリアへ行く、生きて帰れるか帰れないか分らぬ、死んだならば、必ずこの日記を世の中に出してくれ、僕の一生に於て、現世に残して行く、おくりものはこの一篇だけだ、この日記ももの足りないものだ。が、僕の心

の一部だけは、表はしてゐる。時に、字がまちがったり、文句がへんになってゐるところがある。が、そんなところをなほすひまがない。

さらば我れを知りてくれし人々よ！

繁治兄よ、松蔵兄よ、

梅溪氏よ！

なすこと少なくして、吾は、遙か北なる亜港の地に行くぞ

！

と書く。繁治とは一歳年上の同郷の友人壺井繁治であり、松蔵とはやはり同郷で、早稲田大学高等予科文学科在学時同居していた居出松蔵であり、梅溪氏とは高須芳次郎梅溪であることは無論である。ときに傳治の最も思いの深い三人のうちに梅溪はいる。

また、定本全集年譜大正八年（一九一九）には、

「この頃高須梅溪と知り合う（注20）。」とあり、その注20には、

「暁聲入社当時から使用の手帳は住所録としても使用。その中に高須の四種類の住所を記す。同じく記載されている繁治の住所の変遷から使用期間は、大正八年から十四年頃までと推

定可能。」

とあつて、すでに軍隊日記以前の、大正八年頃から知り合う可能性について指摘している。

さらに、大正十二年（一九二三）には、弟光治宛の書簡の中にたびたび梅溪の純正文化研究会の会員勧誘について述べている。

○四月二十七日付

「誰か外に高須氏の文化研究会に入会する如き篤学の士なきや、高師、東同、外語等如何、高商の如きは、社交術談話の巧なる者ならざる可からず、不適ならずや、」

○五月十四日付

「高須氏の純正文化研究会に入会する如き人士なほなきや、米沢氏は大阪の何処なりや、住所をきき合せて葉書で勧誘してくれぬか、この研究会は、新文化の先駆者なり、新しく文壇に出んとすれば、須く文化研究会に入会すべし、といふ調子で云つてやるのだ、藤井松氏は入会の見込なきや、とにかく、文学をやさりさうな連中は、うまくすゝめると入会する、而して、又、文学をやる連中は入会して損にならぬ、さういふ方面からすすめてみてくれぬか、」

○六月七日付

「米沢鉄之助等は高須氏の純正文化研究会に入会する意志なきや、」

ほかに「六月十日、十一日にも会員勧誘の事が記されている」と定本全集年譜注にはあるが、本文中には該当書簡は見当たらない。

ここで、収録書簡二通の年を推定したい。

傳治書簡(1)の三月三十日付の内容は、梅溪の葉書によるすめで目指す純正文化研究会の思想界、文壇改革の趣旨に賛同し「及ばず乍ら盡力致します。」との返事であり、このやりとりのあと火のついたように弟光治への四月二十七日、五月十四日、六月七日の葉書での催促となったと考えれば大正十二年のものであると推定できるであろう。

傳治書簡(2)の十二月二日付については、会員勧誘の効果はかばかしくないところへ梅溪から葉書があつて、言い訳がましい身辺報告をして、「来春にもなりましたら、上京して、御邪魔に上らうと、思つてゐます。」と返事している。定本全集年譜では、傳治の「プロレタリア作家経歴談」の『東京へ遊びに出て、少しめて帰国し、十三年の春にも再び上京』をつけて「春、上京」、五月二十六日消印光治宛書簡により「六月九日、上京」とあいついで二度の上京を挙げていることから、これもやはり大正十二年のものとして推定することができよう。

現在、高須梅溪から傳治への書簡は知られていないが、神戸親

和女子大学国語国文学会主催の「生誕一〇一年記念黒島傳治展 平和への祈り」カタログ中、同大学国文学科長唐井清六氏が黒島傳治展開催にあつてと題し「生原稿や手帖、書簡、校正刷り、新聞・雑誌の切り抜きなどの数々は、ご遺族のご好意によつてすべて本学附属図書館に寄贈されることになった。」と述べていること、また、内海町の壺井栄文学館に資料、遺品、書簡、八ガキ、写真等が保管されている(定本全集第五巻あとがき)ことから、これらの中にこの時期の梅溪からの書簡が見出せれば、これら二通の傳治書簡のはっきりとした発信年が確定されるともに梅溪との関係が一層鮮明にされるであろうが、ここで一応梅溪との関係についてみてみよう。

定本全集年譜 注35 には、梅溪の『明治大正昭和文学講話』から引いて「傳治は最初、自然主義的なものを書いてゐたが、一転して、プロ派に飛び込んだ」とあるが、梅溪にとつてはじめはそれまでの梅溪の思想、「これから展開しようとする文学運動にとつて、傳治を熱心な賛同者とみて積極的によびかけていたのは確實であり、一方傳治にとつても、当初の讃仰にも近い熱烈な思ひから次第にこの梅溪の運動を文壇進出の足がかりとしようとの考えを強めての接近に変わつていったことがあつたことが考えられる。

弟光治あての複数の書簡では、「新しく文壇に出んとすれば須く文化研究会に入会すべし」、「文学をやりそうな連中は、うまくすゝめると入会する、而して、又、文学をやる連中は入会して損にならぬ」と、本心を述べていることでもわかる。

本稿傳治の二通の書簡の文面をみてみると(1)と(2)の間に相当の変化が感ぜられる。(1)では、文壇刷新の梅溪の新運動への賛意と期待の熱をまだ残しているが、約8カ月後の(2)では、ごくありきたりの近況報告でお茶をにこし時間かせぎをしているがごくくみてとれる。

この時期大正十二年には、すでに傳治は、「電報」、「窃む女」(以上三月)、「創作ノート」(六月)、「砂糖泥棒」、「まかないの棒」、「田舎娘」(以上十二月)(青磁社浜賀知考『黒島傳治の軌跡』による、以下も)を書きためていたし、その後大正十三年には、「田園挽歌」(十月)、「崖の上」(十一月)、大正十四年には、「路傍の草」(三月)、「栗を食う牝牛」(五月)などが書かれているのである。

かくて、大正十四年十月「紋」を、高須芳次郎・オリエンタリズム個人雑誌「東方之星」第六号(東方之星文学社 大正十四年十一月一日)に掲載されることによって、ともかくも作品発表の目的が達せられるが、同誌への発表はこれのみで終り、以後は、

梅溪が「一転して、プロ派に飛び込んだ」というように、梅溪と傳治は急速にはなれ別の道を行くこととなる。

遠く中央から離れた小豆島の日々の貧しい生活という環境から身についた身すぎ世すぎの知恵(生涯こつぱりとした生活態度を貫く)に、さらに軍隊生活の経験を加え、友人の壺井栄や繁治からさえも、計算高く身勝手な行動をとると思われる傳治であるから、文壇進出の一時的手段として梅溪に近づいたとしても早晩離れてゆくのは当然のことであつたらう。

注1 「個別解説」には、「書簡」

大正七年から昭和七年の書簡の原物にすべて当り、八八通収録。そのうち未発表のものは六通である。』とあり、四通と六通の違いがある。

注2

香川県の方言。風間書房刊近石泰秋著『香川県方言辞典』には「こじんまりと。簡素に煩らわしくないように。(こつぱりしたうちじゃ。丸亀)」とあるが、筆者はふところ具合つまり家庭経済が小金をもつ中流の豊かさを指すものとみている。

次に、壺井繁治の書簡については、これまで一つにまとまって発表されたものを知らない。青磁社刊の『壺井繁治全集』(全五

巻別巻一)にも収録されていない。

しかし、一連の都留文科大研究紀要鷺只雄「壺井栄論」(一)～(十一)において、「未発表の壺井栄と繁治の往復書簡翻刻」として発表されたもの等相当数まとまって発表されており、さらに文泉堂出版『壺井栄全集』(全十二巻)の第十二巻解題(鷺只雄)で、「別に獄中往復書簡集を一冊刊行する形で目下準備中」と知らされている。

プロレタリア文学運動下のものも含めて残された書簡は、壺井家だけでも三千通(夫妻にあてたいわゆる宛書簡も含めて)を越すといわれる^(注1)。繁治は、妻である栄に比していわゆる一般的に広く世に迎えられるものではないが、その広範で活発な詩活動や結社活動が栄の死後も八年間続けられたこともあって、これからも相当な数が世に出てくる可能性があるといえる。

本稿で翻刻紹介する繁治書簡四通は、いずれも札幌市在住の和^(注2)田義雄にあてたものであり、(1)～(3)は妻栄生存中のもの、(4)は死直後のものである。

(1)昭和28・5・23付繁治書簡の内容は、三月繁治が多喜二祭のため北海道で巡回講演の途次札幌へ立寄った際のこと、帰ってから二月二十八日の衆議院予算委員会での吉田茂首相の「バカヤロ」発言に端を発した国会解散により四月十九日の第26回総選

挙、四月二十四日の第3回参議院選挙とつづき忙しく疲れたこと、妻の栄が前年(昭27年)の「二十四の瞳」の雑誌連載、単行本出版、映画化決定、そして現在のラジオ放送、作品発表と悲鳴をあげるほどの忙しさのため手紙も書けなかったことを詫言っている。

(2)昭和36・3・28付繁治書簡の内容は、二月十九日から二十八日まで北海道を旅行した折、札幌で立派な和田氏邸に泊まったことについて礼をのべ、それにひき比べて15回転居のすえに落着いた鷺宮の自邸^(注3)の改築がいまだ完成しないこと、妻の栄がジンマシンのほか持病の喘息をおこしたことなどを述べている。

この年繁治は、6月10日江^(注4)口候団長の訪中日本文学代表団の団員として訪中する。

(3)昭和40・12・21付繁治書簡は、妻栄の今年二度目の持病喘息による入院と病状をまず知らせ、自伝『激流の魚』の執筆についてふれ、来年の小熊^(注5)秀雄の詩碑建立に出席する予定を告げる。また、この年は自身の満六十八歳、来年満六十九歳数え七十歳となることも告げる。

なお、十月十七日、建立実行委員長として募金に奔走してきた黒島傳治文学碑の除幕式出席のため小豆島に帰ったことは書かれていない。

(4)昭和42・7・20付繁治書簡は、七月二十三日の妻栄死去に対

する和田義雄の悔やみの手紙に対する返事である。

妻栄の死をおもつ悲しい文章がつづられる。

まず、通夜の晩の混雑で、栄の死顔をみてもらうことができなかった残念さを云い、ついで「長年の病気で、骨も弱っていたのか、あれだけのからだだが焼きおえられたとき、普通だったら骨壺に溢れるぐらいだと思っていたのが、案外に少なく、みんな驚いていました。あの晩、二人だけだったら、ほんとうに聲をあげて泣きたいくらいでした。」と切々たる思いが述べられる。

たしかに妻栄の生涯は戦前戦後の貧しさとのたたかい、流行作家となつてからの過労から得た病いと絶えざるたたかいであつたといえる。

繁治は、この年(注5)の秋、栄死亡後の雑事と心労が重なり、風邪がもとで肺炎となり、高熱のため幻覚状態が起つたりする。そして寝たり起きたりの状態がつづく。

注1 文泉堂出版『壺井栄全集』第十二巻解説。

注2 和田義雄（大正3・3・2～昭和59・10・10）。口語歌人。児童文学作家。昭和12年札幌花園町松竹座前に「茶房・銀と金」を開く。著書に『札幌喫茶界昭和史』、『雪の花が咲いた』、『月の夜のママ』など。

注3 当時中野区鷺宮一七八六、現中野区白鷺二丁目一八七か。

なお、筆者は、一九八〇年頃白鷺の宮川寅雄先生宅を訪ねる折たびたびこの壺井家の前を通っていた。

注4 大正・昭和期の小説家、社会運動家。著書に『性格破産者』、『わが文学半世紀』など。民衆芸術派の旗手として大正文壇に活躍したのち、昭和期にも人民戦線の立場を貫き、戦後、新日本文学界の有力メンバーとして活躍した。（新潮社編『新潮社日本人名辞典』より）

注5 昭和期の詩人。北海道生れ。著書に『小熊秀雄詩集』など。饒舌で苛烈な詩精神をもって時代に抗し時代を撃ち続けた。（新潮社編『新潮日本人名辞典』より）

注6 青磁社刊『壺井繁治全集』年譜

最後に、壺井栄の書簡については、文泉堂出版刊『壺井栄全集』（以下『全集』という）に二一六通が収録され、壺井家蔵とその他の個人的好意から収録を許可されたもの（『全集』解説）といる。従つて、今後、すでに所在判明で未収録とされたもの、非常に世に迎えられて人気の高いところから全国に亘つて収蔵されているであろうものなどから、つづいて発表されてゆくものと思われる。

本稿収録の一通は、断簡に等しいごく簡単な内容のものである

が、それでも宋の日常些些たることに對しても細やかな心遣いと宛者への距離感がうかがわれるものである。

凡 例

書簡翻刻は次の要領でおこなった。

一、原文の表記を尊重し、そのままとした。明らかに誤字とわかる場合もそのままとし、右側に「ママ」を付した。

二、書簡の記載順序は次の通り

イ 通し番号 執筆年月日……通常手紙は月日のみで年は記されていないのが普通であるが、消印や内部徴証から確定した。封筒なしの場合は、年不明と表示し、推定部分を（ ）でかくって示した。

ロ 消印 取扱郵便局名 受付時刻……封筒なしの場合は、封筒なしと表示した。

ハ 封書表示 用紙の種類（原稿用紙の場合、会社等の名と四〇〇字詰は20×20、二〇〇字詰めは20×10と表示）と枚数
使用の筆記用具。

ニ 発信人住所氏名

ホ 受信人住所氏名

へ 本文

（凡例作成にあたっては、都留文科大研究紀要、鷺只雄「壺井栄論」の凡例及び文泉堂出版『壺井栄全集』第十二巻「書簡」の凡例を参考にした）

黒島傳治書簡二通

(1)年不明（大正12年か） 3・30

封筒なし

20×20原稿用紙二枚 ペン 三月三十日

黒島傳治

高須先生

拝復

御葉書有り難う御座いました。いよく堂々旗色を明かにされて、活動に着手さるる由、一つ、思ひ切った方法と、際立った色彩と、魅力とによって、思想界、文壇を席卷して下さい。それによって、私等の心に^{（注）ママ}顫感を与へる先生の御言葉を聞きたう御座います。私も及ばす乍ら、盡力致します。どうぞ詳しい細目が定まりましたら御知らせ下さい。

広い所でなくともいいから、渦巻きを起さしてやりたい気が致

します。先生の御活動、主張の一部をこの島に吹きこんで、煮え返らし度う御座います。早く第一号^(注²)の陣容を見せて下さい。

三月三十日

黒島傳治

高須先生

先日、小学校の教科書を一寸見ましたが、芸術思想等の方面に於ける教材の無いのに驚きました。歴史などでも、新井白石とか、徳川光圀とかは出てゐますが、近松、芭蕉などは名前さへも見えません。明治時代などでも、戦争とか、事変とかが主として載つてゐて、文化、思潮の変化はほんの僅か。それも明治天皇の事蹟に関連して。しか出てゐません。

注1 震撼か。

日本人の感情、思想等は、小学時代から曲げられて行つてゐるのではないでせうか。

注2 東方之星文学社の機関誌「東方之星」が創刊されたのは大正十四年六月のことである。

現在の社会生活や個人の生活中、私等のやうな鈍感な者の眼に映るだけでも、改革すべき点は多々あります。併し、まだ、多くの人々が気付とつく^{ママ}についてゐるのでせうが、實際手をつけて成功してゐるのはあまり見つかりません。どうか、先生の御活動により、新しい運動、力強い勢力が一般に行き渡つて来るやうになれば、どんなにいいでせう。始めは深く、そして、次第に広く及ぼして。

(2) 年不明(大正12年か) 12・2

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

封筒なし

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

便箋三枚 ペン 十二月二日

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

黒島傳治

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

高須先生

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

拜復

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

御葉書ありがたう御座いました。永々御無沙汰致しまして、誠に申し譯ありません。

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

御壮健で、益々御仕事に身を入れてゐらるゝ由、結構で御座います。

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

早や、今年も、あと僅かになりました。御地では、年の瀬の張りつめた気分が、みなぎつてゐること、存じます。

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

ます。

幸に、御壮健で奮闘さるゝ様祈ります。

早や、今年も、あと僅かになりました。御地では、年の瀬の張りつめた気分が、みなぎつてゐること、存じます。

忽々

りつめた気分が、みなぎつてゐること、存じます。

来春(注1)にもなりましたら、上京して、御邪魔に上らうと、思つてゐます。

その後、なにもせず、ぶら／＼と暮してゐます。書いてみようと思つて、やりかけてみましたが、見ていたゞけるようなものが出来上がらずに、自分ながらつまらなくなって、やめてゐます。病気は、もう、殆ど影を潜めて、平常と別に変らなくなりました。が、もともと、慢性な病気で御座いますから、十分静養しておきたいと思つてゐます。

大抵、毎日、朝、起きますと、海岸か野山を散歩して、その後、昼までは、縁側で、日向ぼっこをしたり、少しづつ、露西亞語の復習をしたりします。午後は、山に登つたり、海岸を一里あまり、伝つて行つて帰つたりして、(注2)あます。寒(注2)暖溪(注2)(珍らしい恰好をした岩石や、紅葉で、せゝこましい感じは致しますが、一寸いゝ山でございます。)へも登つてみました。ある人は、耶馬や、妙義よりも、寧ろいゝと申しますが、どうですか、私は耶馬へも、妙義へも行ったことがありますから分りませんが、併し、折がありましたら、先生に、お目にかけたいと思ひます。

兵隊に行つてゐたり、病気にかゝつたりして、まる三年、なにもせず、つぶしてしまひました。が、来年は、新しく出発したいと思ひます。海のものとなるか山のものとなるか、自分にも分

らず、心細い次第で御座いますが、行けるところまで行つてみたいと決心してゐます。どうか、これまでと変わらず、御示教下さる様お願い申し上げます。

尚ほ、寒さが次第に加はる折柄、御身御大切の程祈り上げます。先は、右、近況御知らせまで

十二月二日

忽々

黒島傳治

高須先生

注1 大正十三(一九二四)年二十六歳の春、上京。

注2 寒霞溪の誤りと思われる。

壺井繁治書簡四通

(1) 昭28・5・23

消印 中野 28.5.24 後0.4

封書 便箋四枚 ペン 五月二十三日

東京都中野区鷺宮一ノ七八六 壺井繁治

札幌市南七条西十丁目 和田義雄様

こちらこそ、長らく御無沙汰して申し訳ありません。北海道からかえって以来、選挙で一ヶ月つぶれてしまい毎日いろくな合会にひっぱり出されて、すっかり疲れてしまいました。あんまり疲れて、胸でもやられているのではないかと思い、レントゲン写真をとったりしましたが、それは何でもなかったですが、血沈をはかったところ、五十もちょっとびつくりしました。一時的な疲労でしょう。

昨夜、第一生命ホールで、久保栄の「日本の気象」の上演（民芸）があり、観に行ったところ、偶然、五城君に会いました。わざわざこの芝居を見に来たらしく、その熱心さには驚きました。そこであなたも話も出て、御元気でやっていられることをき、安心いたしました。御手紙を拝見しても、いろいろ御忙しい様子ですが、そんなに御元気になったことは何よりです。どうぞどしく活動して下さい。女房はあなたの方へちつとも手紙を出してないようですが、他意あるわけではなく、ただ忙しさに追われて、人への手紙も書くひまなく、悲鳴をあげています。目下ラヂオ東京で「二十四の瞳」を毎月曜夜8時30分から文学座が放送しているのですが、録音の際、指導にひっぱり出されています。それから「主婦の作文」の批評も毎週持たされて、これは当分つくらしいし、婦人公論の連載で、毎月切間際に徹夜騒ぎです。

小生は今月末大阪方面へ一週間あまり旅行に出ますが、またかえってからお便りいたします。シャシンありがとう。全く自分ながらコツケイなようなポーズですね。

奥さんは、その後御元気ですか。どうか大事にしてあげて下さい。あんない、奥さんを困らせると、罰があたりますよ。

五月二十三日

壺井繁治

和田義雄様

注1 小説「二十四の瞳」は、「ニューエイジ」昭和27年2月号〜同年11月号に連載。昭和26年度第2回芸術選奨文部大臣賞を受賞。昭和27年12月25日単行本として『二十四の瞳』光文社から刊行。同年12月30日松竹の木下恵介監督から映画化の申込をうける。

注2 「婦人公論」昭和28年4月号〜同年12月号に「岸つつ波」を連載。

(2) 昭和36・3・28

消印 中野 36.3.29 後の12

封書 20×20 壺井繁治原稿用紙二枚 ペン 三月二十八日

東京都中野区鷺宮二ノ七八六 壺井繁治

札幌市琴似町宮の森五七〇 和田義雄様

啓上。十日間の旅ていをおえ、室蘭を最後に、二月二十八日無事帰京しました。それからはや一ヶ月たちましたが、御厄介になりながら御礼の手紙も差上げず、ほんとうに失礼しました。十日間も東京を留守にしていたので、いろいろ片づけねばならぬ用事が山積し、また会合やら何やらで、いつの間にか日がたつてしまいました。それに女房がシンマシンのほかに喘息を起し、セキで夜もねむれる日が続き、医者をやんだりの大騒ぎでしたが、二三日前からやっと小康を得ました。からだ全体がひどく弱り、食事も進まず、もしかするとどこかへ入院して暫らく療養しなければならぬような状態です。

札幌ではあなたのお宅に泊めていただいてほんとうに助かりました。釧路でもいい宿屋で安眠できましたが、何しろ強行軍で、東京へかえってから疲れが出て、二日ほど休みました。あなたのお宅はたいへん立派で、ほんとうは時間があればもう一、二日滞在したい位でした。わたしの家は取っばらったまま、まだ基礎工事にもかかわらず、家ができあがるのは、早くて秋ごろではないかと思っています。應接間、その二階のわたしの仕事場はこわさずにひっぱり、そのほかのものをつき足して住んでいるのですが、不自由なアパート住いのようで、女房も落ついて休みぬ状態なのです。

新聞わざく御送り下さってありがとうございます。

東京は珍しく二三日前雪が降りましたが、すぐとけてしまい、すっかり春めいてきました。そちらはまだ雪に埋まっていることでしょう。ではまた。どうぞお元気に。末筆ながら奥さんによるしく御伝え下さい。

三月二十八日

壺井繁治

和田義雄様

注1 都留文科大学研究紀要第44集鷺只雄「壺井栄論(十一)」第三
章激流(二) 一(一) 転居先追跡⁽¹⁵⁾中野区鷺宮二七八六
の家。つまり第15回目の転居の家。昭和17年9月24日、八幡神
社の土地を借り、日本電建の月八一円の月賦で建てた。後、昭
和34年全面改築。この手紙では、更に昭和36年工事をしている
と思われる。

(3) 昭40・12・21

消印 中野 40.12.23 後〇6

封書 20×10 光和堂原稿用紙四枚 ペン 十二月二十一日

東京都中野区白鷺一丁目一八の七 壺井繁治

札幌市琴似町宮の森五七〇 和田義雄様

お手紙拝見しました。それにひきつづいて塩鮭も届きました。ほんとに有難うございます。これでお正月にかくことのできものが整い、ほんとうに助かります。女房は去年も暮から正月へかけて入院し、今年もまた暮の入院です。今年は二度目の入院ですが、前の入院は十日位で、厄介な発作もびたりと止まり、奇蹟が起つたと、家族一同喜んでいたのに、最近の寒さで入院です。本人が一番苦しいと思いますが、暮の入院で家族たちもテンテコ舞いの有様です。十四日に入院したのですが、吐気が連続的にやってきて、お茶まで吐き、一切食事がとれず、リンゲルの注射でやっとからだを保ちました。一時は心細いことをいって、もう病院から帰れぬのではないかと呟いていましたが、昨日来吐瀉もゼンソクの発作もとれ、ようやく落ち着きましたから、どうぞ御安心下さい。

わたしの『激流の魚』は今年主に軽井沢に籠って書きつづけたのですが、九百枚もの大部もので、幼年時代から終戦の日までであれだけになったのです。後篇の戦後は年が明けてから着手しようと思っています。

北海道新聞でも書評にとりあげてくれるといっています。わたしは来年もう数え七十才ですが、幸いからだは割合元気で、わたしたちのやっている「詩人会議」の仕事でよく飛びまわっています。

ます。今夜もメンバーの詩集出版記念会がありますので、それに出席のあい間にこの手紙を書いております。来年の五月には小熊秀雄の詩碑が建立される予定になっており、その除幕式には出席する積りですから、その節には札幌へ立ち寄り、お邪魔させていただきます。ただきたく考えています。

ではよい年をお迎え下さるよう。

十二月二十一日

壺井繁治

和田義雄様

注1 三月九日から四月十九日まで伊東の天城診療所に転地療養する。

ここでは一カ月と十日ほどの入院である。十日位とあるのは思い違いか。この時の病気は、慢性肝炎、喘息、糖尿病、心臓病、尿崩病、ブレドニン中毒症の六つであった。(『壺井繁治全集』年譜)

注2

四月、詩人会議第四回総会が品川私鉄会館で開かれ、民主的詩運動の全国的組織に改組を決定する。この総会において運営委員長に選ばれる。

(4) 昭42・7・20

消印 中野 42.7.22 後〇〜6

封書 便箋四枚 ペン 七月二十日

東京都中野区白鷺一丁目一八の七 壺井繁治

札幌市琴似町宮の森五七〇 和田義雄様

只今御手紙拝見いたしました。

お通夜の晩は、あなたといういろいろお話したかったのですが、何しろ、あの通りの人の集りで、どうにもできませんでした。栄の最後の顔をあなたに見てもらいたかったのですが、それでもきず、あなたとしてもさぞこころ残りだったろうと思います。

長年の病気で、骨も弱っていたのか、あれだけのからだが焼きおえられたとき、普通だったら骨壺に溢れるくらいだと思っていたのが、案外に少なく、みんな驚ろいていました。あの晩、二人だけだったら、ほんとうに聲をあげて泣きたいくらいでした。葬儀にまぎれて、方々からのおくやみの手紙にも眼を通していませんでしたが、いくらか落着い時間ができ、深夜栄が寝ていた部屋の掘炬達マユの上で、あれこれと読んでいるうちに悲しみに誘いこまれ、読むのをやめたりいたしました。今はもうだいぶんこころにも落着きができましたが、あなたから御手紙をいただいて、またあらためて悲しみに誘いこまれました。

「注群像」八月号に短い思い出を書きましたが、出版部のひとがそれを読み、わたしたち四十三年間の結婚生活のくさぐさを自由

に書いてくれという申し入れがあり、亡き栄のために承諾しました。これは書き下ろしで、だいたい五百枚ぐらいになる予定です、今年中に書きあげ、来年早々本にする予定です。

あなたと交渉のあった部分も書きこみたいと考えていますので、お忙しいところ恐縮ですが、メモ程度でよろしいから、参考のため御送り下さい。

二人で北海道へ行けなかったのは、なんとしても残念です。多喜二のおばあちゃんからも何度も北海道行きをすすめられたのに、わたしばかりが何度も北海道へ渡り、彼女はついに北海道を知らずにこの世を去ってしまいました。それでも北海道人であるあなたと知り合っただけ、彼女が書いたもので、最後に活字となったのは、北海道電力会社発行の「フロンティア」⁵に発表した「北海道の味」で、これはいわば栄の絶筆です。こういう意味で、北海道へは行けなかったが、北海道と縁があったのだと思います。今わたしはこれを読みかえして感慨にふけています。

小熊秀雄詩碑の除幕式のため北海道へ渡ったとき、まさか女房が今年のこんなに早月日に亡くなるうとは考えていませんでした。人間の未来というものは全く分らないものです。わたしが札幌空港を発って羽田へ着いたのは、六月一日の夕方でした。家へ帰ると、その日、偶然にもわたしの書齋へ架けてあったわたしの肖

像画が、ヒモが切れて墜ちたのだそうです。女房は縁起をかつぎ、飛行機でかえるわたしの身辺に何か変事が起った凶徴ではないかと非常に心配したのだそうです。かえるなりわたしはそのことを女房にいわれました。それほどわたしのことを心配していた彼女が、ついに先きに逝ってしまったわけです。

また書きたいことがつきつきに湧いてきますが、今日はこれだけやめておくことにしましょう。

東京の暑さは高い湿度を帯びて、晝も夜もやりきれないくらいです。風邪をひき、三四日寝こんで、やっとこれが書けるところまで元気を回復しました。

では又。

七月二十日

壺井繁治

和田義雄様

注1 群像昭和42年8月1日発行第22巻8号 P226 } 227 「妻・壺井栄のこと」(一九六七・六・二六記)として発表。「栄の作風は一般に手堅く、庶民的であるといわれているが、その底を貫いているものは歌であり、しかもそれは『生活的抒情』のようにわたしには考えられる。彼女は観念的なことや、いわゆる理屈ばつたことは大嫌いで、自分の手でさわり、肌でふれたものでないかぎり、容易に信じないようなところがあった。そこに彼女の文学のプラスもあれば、またマイナスもあるのではなからうか。

彼女との四十三年間の連れ合い生活の中で、苦楽に彩られた思い出はたくさんあるが、昨日葬式をすませたばかりのわたしには整理がつかぬ。わたしはいずれ彼女のために、わたしなりの『鎮魂歌』を書くであろう。」

(壺井栄氏は六月二十三日午前零時五十八分逝去されました
編集部)

壺井栄書簡一通

(1) 昭31・12・3

消印 中野 31.12.4 後〇6

封書 便箋一枚 ペン 十二月三日

中野区鷺宮二ノ七八六 壺井栄

新宿区市ヶ谷薬王寺町八三 六友社御中

「風信」をいつもお送り下さいまして有りがとうございます。
楽しくよまして頂いております。責任を感じないで読んでくれるとあるのを拝見して、少々責任を感じさせられました。僅かながら、誌代を同封いたします。

十二月三日

壺井栄

菅原宏一様

高松大学紀要

第 42 号

平成16年 9月25日 印刷

平成16年 9月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811